

歴史を語る建物たち

第13回

今日、20世紀型の開発優先社会は終息を迎え、文化、景観、観光などの側面から歴史的建造物が見直されるようになってきた。平成8年の登録有形文化財制度の発足などは、その象徴である。しかし、一方で、文化財指定を受けていないがその価値は十分にある古い建物が、道路の拡幅などで無造作に壊されていく現状もある。本シリーズでは、文化財指定を受けた有名建造物から、街中にひっそりとたたずむ建物まで幅広くスポットを当て、それらの歴史的経緯やエピソードなどを紹介する。

旧済生館本館「山形市郷土館」(山形市)



かつて山形城があった霞城公園の一角に、三層の棟(三層楼)を持つ建物が静かにたたずんでいる。

昭和41年に国指定重要文化財に指定された、旧山形市立病院「済生館本館」(現在は山形市郷土館)である。

豪商の孫の死がきっかけで病院開設へ

明治6年、村山郡天童村(現・天童市)の豪商であった佐藤伊兵衛の孫が、ジフテリアにかかり死亡した。佐藤はこれを深く悲しみ、旧天童藩医などと相談して、村内に私立病院を設立した。しかし、経営難から県立に移管、明治9年に三島通庸が山形県令(現在の県知事)になると、部下に東京や横浜の病院を視察させ、明治11年、現在の山形市立病院がある場所に、近代建築の粋を集めた病院を建造した。山形の宮大工の棟りょうを数多く呼び寄せて造らせた擬洋風の木造建築は東北随一と言われ、わざわざ弁当を持って遠くから見物に来る人もいたという。山形県を“東洋のアルカディア”と呼んだ英国人旅行家のイザベラ・バー

ドも、「非常に立派な建物」と著書の中で賞賛している。

明治維新の功績で新政府ともつながりがあった三島は、時の太政大臣・三條実美に頼み、「済生館」との命名を賜った。また、明治13年には、来日中のオーストリア人医師・ローレツを月給500円(現在の価値に換算すると約270万円)という破格の待遇で招き、済生館



明治期の済生館。三層楼には舶来の色ガラスをはめ、夕日にさんざんと輝く姿は地元民を驚かせた。
資料：ポストカードより転載(山形市郷土館頒布)

は名実共に東北地方を代表する高度医療機関となった。

その後、県が財政難に陥ったことから、済生館は民間に移管された。しかし、民間でも経営難となったため、明治37年には経営が山形市に移管され、山形市立病院済生館として今日に至っている。

危険なランドマーク

昭和16年、日本は太平洋戦争に突入するが、次第に戦況は悪化、昭和20年に入ると、米軍による本土への空襲も本格化してきた。当時、済生館の三層楼は市内で最も高い木造建築物であったため、空襲の際には格好の目印（ランドマーク）になる危険があった。特に、病院が爆撃された場合の被害は甚大であることから、軍関係者などは建物の撤去を迫った。しかし、明治以来の歴史的建造物を壊すのは忍びないと判断した大内恒市長（当時）は、三層部分とその上の尖塔のみ撤去し、爆撃を逃れたときには戦後速やかに復活すべく、すべての木片に番号を付して、病院敷地内の空地に保存した。

この作業は昭和20年7月半ばから行われたが、撤去が完了した数日後に終戦を迎え、保存しておいた木片も、戦後の混乱ですべて散逸してしまった。したがって、戦後の三層楼は二層のままであった。

日本画家の巨匠・東山魁夷は、戦後の三層楼を描き、ブラジルのサンパウロで開催された国際美術展に出展したが、その後、山形の知人に宛てた絵はがきに、「一番上の部分があった時のことは、戦前にも一度見たのですが、覚えがありません。惜しいことです。昔のように直してほしいものです」と書いている。

2度目の解体危機を脱する

昭和の初め頃から、済生館では鉄筋病棟の増改築が行われていたが、昭和30年代になると、近代病院機能の充実を図るべく、済生館の全面的改築計画が持ち上がった。当時すでに、三層楼は老朽化ゆえほとんど利用されておらず、「明治村」（愛知県犬山市）への寄付も、移転経費等の面で交渉がまとまらなかったため、計画では解体・撤去が予定された。

しかし、山形市民や山形県建築士会などが強く保存を望み、昭和41年には三層楼が国の重要文化財に指定されたことから、最終的には保存が決まった。ただし、病院改築計画で、同じ場所に保存することは不可能であったため、霞城公園内の現在地に移築・復元されることになった。当時の済生館長（病院長）・米地俊一の息子である文夫氏（岩手県立大学名誉教授）は、「父は、三層楼を新病院の“屋上”に移すことも考えていたようです」と述懐する。自ら病院改革を進めながら

も、三層楼は保存してほしいと願っていたのだろう。

移築・復元作業は非常に困難を伴った。特に、戦時に撤去した三層楼の三層から上の部分や、増改築の過程で取り壊された三層楼以外の部分は、写真等をもとに復元する必要があった。また、塗装も明治時代の手法を用い、明治11年当時の姿に戻していった。

作業は昭和42年7月に始まり、昭和44年12月に完了した。しかし、昭和44年3月に退任した米地館長は同年9月に亡くなり、復元された木造済生館を目にすることは叶わなかった。

守り抜くことこそが使命

移築・復元された木造済生館は、「旧済生館本館・山形市郷土館」として、昭和46年4月に開館した。郷土館では、山形県の医療史に関する資料や、病院建設を推進した三島県令に関する資料等、郷土の歴史資料を公開している。

県外からの来訪者も多い。管理事務所のスタッフは「仙台のお客さんは、仙台が空襲で焼け野原になったことから、（空襲を逃れた）山形のまちなかにこのような歴史ある建物が残っていることをうらやましがっている」と話す。

なお、山形市では、郷土館をより多くの人に見てもらおうと、平成21年4月から入館料を無料にした。前述のスタッフは、「お客さんへのアンケートを見ると、『このようなすばらしい建物を無料で見られてうれしい』というコメントがある一方で、『こんな立派な建物が無料なんてもったいない。維持・管理も大変だろうから、有料にしてもよいのでは？』というコメントもある」と笑う。

そして最後に、「観光客などが多く訪れてくれるのはありがたいが、私たちの使命はあくまでこの建物を守り、その歴史的価値を後世に伝えていくことです」と語ってくれた。
(荘銀総合研究所 研究員・山口泰史)



かつて三層楼が建っていた近くには、往時の姿をイメージさせるモニュメントがある（筆者撮影）。